

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：22701

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K19177

研究課題名(和文)NICUフォローアップ外来における低出生体重児の授乳・離乳に関する看護師の支援

研究課題名(英文)Nurses' support for feeding of low-birth-weight infants in NICU follow-up

研究代表者

藤塚 真希 (FUJITSUKA, Maki)

横浜市立大学・医学研究科・客員研究員

研究者番号：80805888

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：(1)文献検討を行い、NICUフォローアップ外来において看護師が食事指導や育児指導を実施していることが報告されていたが、具体的な支援内容や支援方法は分からなかった。(2)実際の支援場面のフィールドワークを行い、専門職者が親と情報共有しながら子どもを包括的に捉え、離乳の進め方を共有していることが分かった。また、親が困っていることに関して一方的に指導するのではなく、親の懸念点を探りながら親が安心できる方法に修正し、親の意思を尊重していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、NICUフォローアップ外来における低出生体重児の授乳・離乳に関する看護師の支援を検討することを目的に、支援に関する文献検討とフィールドワークを行った。その結果、看護師によるFamily-Centered Careの概念に基づく支援の示唆が得られた。しかし、多職種によって子どもを包括的に捉える難しさが示唆され、様々な支援場面で活用できるスクリーニング方法を検討する必要がある。また、親とのパートナーシップを構築する上で、今後は離乳期における親の経験の明確化も必要だと考える。

研究成果の概要(英文)：(1) We conducted a literature review of focusing on nurse's support in NICU follow-up outpatient clinic. Nurses provided dietary and childcare guidance, but the specific content and methods of support were unknown.

(2) Fieldwork was conducted on actual support situations. It was found that professionals shared information with parents, comprehensively understood the child, and shared how to weaning. In addition, they respected parents' decision by not giving one-sided instructions to parents about troubles, but by exploring their concerns and modifying the methods to make them feel relieved.

研究分野：小児看護学

キーワード：NICU 低出生体重児 早産児 離乳期 NICUフォローアップ外来

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本では 2500g 未満の低出生体重児は年間約 9 万人出生しており、全出生数のうち 9.4% を占める (人口動態調査, 2018)。低出生体重児は在胎週数が早いほど吸啜圧・頻度、嚥下頻度が少なく (Lau, 2003)、経口栄養の開始時期が遅れ、さらには完全経口栄養までに要する期間が長くなる (Jadcherla, 2010)。また、早産の場合は修正月齢 5~6 ヶ月から離乳を開始し、修正 24 ヶ月までが機能発達を決定づける重要な臨界期である (WHO, 2023)。しかし、経口栄養の遅れに加え、運動機能の遅れ (Sakurai, 2008)、神経発達症のリスクも高く (Kono, 2011)、摂食への移行が円滑に進まないという問題がある (Morris, 2000; 板橋, 2003)。さらに、親は円滑に進まない離乳に毎日奮闘しなくてはならず、NICU 退院後には成長発達の把握と離乳食の進め方に関して困難感を抱いている (友滝, 2019)。

NICU 退院後の低出生体重児への支援として、障がいの早期発見・早期介入と育児支援を目的としたフォローアップ外来が設けられており、個別性を重視した支援が必要となる (河野, 2012)。フォローアップ外来では医師だけで授乳・離乳の指導をしている施設が 60% と多い。しかし、医師は低出生体重児の個別性を重視した離乳食内容や離乳方法に関する支援ができず、8 割が専門職との連携を希望しており (佐藤, 2008)、医学的な側面だけでなく低出生体重児と親を包括的に捉えた支援が課題と言える。そのため、NICU フォローアップ外来において、看護師が低出生体重児の成長発達状況を含めて個別性を重視し、親の育児不安の視点からも支援することは、有効的なアプローチ方法だと考える。

2. 研究の目的

NICU フォローアップ外来における低出生体重児の授乳・離乳に関する看護師の支援を検討することを目的に、下記 (1) (2) を行う。

(1) 文献検討を通して、NICU 退院後の低出生体重児の哺乳・離乳の支援の現状について、国内の研究論文を概観し、課題を見出す。

(2) フィールドワークを通して、外来における低出生体重児と家族への哺乳・離乳に関する支援の実際を理解し、看護師の支援を検討する。

3. 研究の方法

(1) 文献検討

文献検索方法

医学中央雑誌 Web 版と CiNii Articles を用いて、検索キーワードを「低出生体重児」または「早産児」を基本として、「退院 or 外来」「哺乳 or 授乳」「離乳食」「離乳」をそれぞれに掛け合わせて検索を行った。周産期医療体制は 1990 年代に注目されはじめ、1996 年に整備指針が制定されたため、検索期間は 1990 年から 2020 年 1 月までを対象とした。対象誌は看護・健康関連の雑誌で査読システムをもつ学術誌とした。学術誌と同様の査読システムをもつ日本看護学会論文集からも検索した。その結果、計 393 件の文献が抽出された。重複文献 176 件、さらに総説・口演 45 件を除き、原著論文のみとすると 172 件であった。その後、抄録を精読し、NICU 退院後の低出生体重児の哺乳・離乳の支援に焦点を当てた研究のみを抽出し、10 件を分析対象とした。

分析方法

対象とした文献を精読し、研究結果の内容を NICU 退院後の低出生体重児の哺乳・離乳の支援について、年代別傾向、哺乳・離乳別の支援の現状を分析した。分析は小児看護の専門家とともに確認を行い、妥当性を確保した。倫理的配慮について記載している文献を対象とし、本研究においても研究内容を忠実に記載することで倫理的配慮に努めた。

(2) フィールドワーク

NICU 退院後の低出生体重児・早産児の哺乳・離乳の支援を行っている外来でフィールドワークを行い、実際の支援方法の観察と聞き取り調査を行った。

4. 研究成果

(1) 文献検討

哺乳については、電話訪問や母乳外来、地域支援、フォローアップ外来において授乳量・時間・回数など授乳に関する相談を受け、母乳育児支援を行っていることが報告されていた。このような支援は、NICU 退院後 1 週間~1 ヶ月の早期の段階から行われており、看護師は母親の授乳方法や子どもの哺乳状況を直接確認しながら支援していることが分かった。しかし、哺乳が困難だとされる低出生体重児に対し、看護支援の効果に関して文献が見当たらず、今後は低出生体重児に効果的な哺乳支援を検討していく必要がある。

また、離乳については、フォローアップ外来において看護師が食事指導や育児指導を個別に行っていることが報告されていたが、具体的な看護支援に関する文献は見当たらなかった。今後は、

母親とともに離乳期における哺乳から摂食への移行を促す有効的な支援方法について、さらに研究を進めていくことが課題である。

(2) フィールドワーク

低出生体重児の親は NICU 退院後の体重増加への不安が強く、“食べさせる”ことに必死になってしまい、子ども自身の“食べる”機能や意欲に合わせられていないことが示唆された。経管栄養併用の場合には、栄養注入量と経口摂食量の調整の判断が難しく、医原性の経管栄養依存に陥る危険性があった。

このような状況における実際の支援方法について、家族の養育のスキル向上や育児不安の軽減が報告されている Family-Centered Care (Cooper, 2007) の概念に基づいて分析した。

| |
|--|
| <p>家族との情報共有 専門職種は疾患の経過や成長曲線含め、子どもの状態を点ではなく時系列で確認し、子どもの持っている能力を包括的に把握していた。そのためには、親からの情報が不可欠であった。また、親から得た情報をフィードバックすることで、専門職者の子どもの捉え方を親と共有していた。</p> |
| <p>家族とのパートナーシップの構築 専門職種は子どもの持っている能力に合わせて、目標を設定していた。目標達成に向けて、具体的な見通し(食事・水分量、体重の目安など)を段階的に想定していた。この目標と見通しを親と共有することで、パートナーシップを構築していた。</p> |
| <p>家族の参加 専門職者は実際に親が困っていることに関して、行動レベルでの対応方法を伝えていた。そして、親の反応をみて、親が納得できるように質問に答えていた。親が子どもの視点になれるように伝えることで、親の在宅での実践を促進していた。</p> |
| <p>家族の尊重 専門職者は離乳を進める方法について、親に一方的に指導していなかった。親のイメージするペースに合わせることや、親の懸念点を探りながら親が安心できる方法に修正することで、問題解決に向けて親の意思を尊重していた。</p> |

(3) 今後の展望

NICU フォローアップ外来における看護支援を検討していく上では、現状の課題として離乳期における多職種による支援の難しさが挙げられる。多職種で離乳期の問題を共通認識として把握するためには、医学的な要因だけではなく、子どもの成長発達や口腔機能、食事の様子、親子関係なども含めて包括的に捉えることが重要だと考える。多職種によるスクリーニングによって、様々な支援場面で離乳期に問題がみられ始めた子どもを早期に発見し、早期支援につなげることができる。

また、看護師の専門性をふまえ、親とのコミュニケーションを通じた情報収集、親の不安軽減のための支援、そして親が子どもの状態を重視して離乳を進めていくための支援において、看護支援の質向上が期待される。看護師が親との協働関係を構築することも不可欠であるが、親が離乳期にどのように子どもの状態を判断し、子どもの離乳を進めているのかが不明瞭であり、今後は親の経験の明確化も必要だと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 田中秀朋, 在本裕子, 豊島勝昭, 坂上彩, 藤塚真希 |
| 2. 発表標題 小さく生まれた赤ちゃんと家族 クリニックの支援・連携 |
| 3. 学会等名 第32回日本外来小児科学会年次集会（横浜）（招待講演） |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 藤塚真希, 佐藤朝美, 下道知世乃 |
| 2. 発表標題 国内におけるNICU退院後の低出生体重児の哺乳・離乳の支援に関する文献検討 |
| 3. 学会等名 第30回日本小児看護学会学術集会（オンライン） |
| 4. 発表年 2020年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|